

嫁どり

昔の婚姻は仲人を介して成立するの
 が一般的である。縁談がまとまると婚
 家からの一升酒を仲人が持参し、この
 時に結納の日取りを決める。これを一
 升酒という。



昭和47年3月に行われた結納の風景(大野町)

結納は本酒ともいい、仲人によつて嫁方へ届けられる。結納品には神仏への供物、嫁・嫁の家族や親戚への土産物や酒、金包みなどがあり、仲人は歓待を受け、嫁取りの日取りや参列者の人数などが相談される。

旧新丸村小原では嫁取りの日が決定すると、その前日から部落の若い衆が総出で花嫁の家から花婿の家に至る通り道に稲のはさ竿などで障害物をつくる。

これによつて花嫁を立ち往生させるのである。そしてこの障害は仲人以外が手を触れてはいけないことになっていた。

同じく須納谷では、明治の頃の嫁入りは夕食後に行なわれた。そして酒宴



花嫁衣装(小松市立博物館所蔵)

の時には窓や戸障子をすっきり取り払い、ムラ人が多く隙見すきみしたといわれるが昭和に入ってから全く絶えてしまった。

丸山では「行き初め」といって嫁だ



昭和31年12月に行われた結婚式の風景(瀬領町)



昭和47年5月に行われた結婚式の風景(大野町)

けが婿の家に行って同居し、婿や婿の家族からその働き具合や所作などが認められた場合、仲人を立てて「布団を持ってきてくれ」と嫁の親に知らせて正式に結婚生活に入るといった慣習があった。

結婚した女性は、歯を黒く染め、眉毛を剃るのが一般的であった。これをお歯黒(かねつけ)と眉落としといった

がどちらも大正末期には行なわれなくなった。

冠婚葬祭の儀礼や年中行事を行なう場合、個人と個人、あるいは家と家との間で金品を贈ったり、また、その返礼をしたりすることを小松では「オウボウをする」といわれた。嫁の実家から婚家へ贈られるオウボウは一年を通じて莫大な回数に及んだ。時には婚家

だけではすまず、その親戚や隣近所へまでもオウボウの手を伸ばさなければならなかった。もしこのオウボウを怠れば「オウボウくがいも知らない家」などのしられることも覚悟しなければならず、娘を多く持った家ではこのオウボウが非常に大きな負担であったために「娘三人持つと身だいが潰れる」といわれた。

(高木明子)